

養護教諭養成教育における養護実習

—— 第2報 STAI検査にみられる養護実習 ——

小林 壽子 大西真由実

Education for Nursing in the Training Institution for Nurse Teacher

The Second report Nursing practice Observed from the point of
STAI Examination

Hisako KOBAYASHI and Mayumi ONISHI

緒 言

第1報では「教育職員免許法の一部を改正する法律」の公布（1989年4月1日）により、本学においても新教育課程の適用対象となった平成2年度入学生を中心としたそれ以前及びその後の教育が、「養護実習」に如何に影響を与えたかを「養護実習評価」の推移の比較研究により、明らかとなった事項について報告を行なった。¹⁾

今回は、STAI検査を実施しそこに現われた学生1人1人の心理状態の変動が、「養護実習」に如何に現れたかを研究する事によって、今まで見えなかった深層部分が明らかとなり、今後の養護実習事前指導（1単位）を含む教育の在り方及び実習校との関係においても、幾つかの知見を得たので報告する。

I 研究方法

今回の研究は養護実習という学生の出身小学校、中学校、高等学校のいずれかにおいて実施する学外の実習の形態のもとに、3週間の期間中での各週毎の学生の「心理状態」を、学生自身の記入により集計を行った。これをもとに更に実習校での学生に対してなされた「評価」及び養護実習での学生の「実習内容」等との関連について研究を行なった。

- 1 対 象 本学養護教諭・福祉コース2年生48名
- 2 実施期間 平成7年4月～6月の3週間及び養護実習第1期開始の4週間前
- 3 方 法 学生の心理状態をSTAI（自己評定質問紙法）^{2) 3)}に記入することで行なった。即ち第1期の実習開始の4週間前に、学内で一斉に実施したものを「事前」とし、その後は各自の実習開始の第1日目を「第1週」とし、次に第2週目の第1日目を「第2週」とし、最後に3週間の養護実習終了日を「第3週」とした。時刻についてはいずれも1日の実習終了時に、実習校で自己記入の方法をとった。

II 研究結果

STAIはスピールバーカー (Spielberger, C.D. 1972)⁴⁾ の不安の特性・状態理論に基づいて作られたものである。質問紙の項目は以下のようになっている。

1. 気が落ちついている 2. 安心している 3. 緊張している 4. くよくよしている
5. 気楽だ 6. 気が転倒している 7. 何か悪いことが起こりはしないかと心配だ 8. 心が休まっている 9. 何か気がかりだ 10. 気持ちがよい 11. 自信がある 12. 神経質になっている 13. 気が落ちつかず、じっとしていられない 14. 気がピンと張りつめている 15. くつろいだ気持ちだ 16. 満ち足りた気分だ 17. 心配がある 18. 非常に興奮して、体が震えるような感じがする 19. 何かうれしい気分だ 20. 気分がよい

これらの20項目に対して「全くちがう」「いくらか」「まあそうだ」「その通りだ」の4段階に対して、その時の該当項目に○印を付し、その結果を4点、3点、2点、1点と点数計算の結果を本人の得点とみなし、特性とした。即ち数値の低い者は不安特性も低く、高い者は不安特性も高いとみなすことが出来る。

1 STAIの個人特性結果

次に表1に示したものは学生48名の養護実習事前及び他は実習校にて学生自身が記入した第1週より終了日の第3週迄の得点及びその平均値を、左に学生の一連番号を付し、更に特性の低い者から順次配列した結果である。最も低い特性値は43.75であり、最も高い値は72であって2名の該当があった。

2 STAIの個人特性平均

図1はSTAIの個人特性平均を点で表わしたものである。その総数の平均値は58.3である。即ち図Iで示されたように55～60に最も多く点在しているのがわかる。

3 STAIの類型

特性結果を事前、1週目、2週目、3週目（終了日）をそれぞれの横軸として、48名を類型化したものが、図2(1)である。10型に分類された。

それらは1型 7名、2型 4名、3型 11名、4型 13名、5型 4名、6型 1名、7型 3名、8型 1名、9型 3名、10型 1名であった。

4 総数の特性結果

48名の特性結果は、事前59.1、第1週58.6、第2週59.9、第3週即ち最終日が55.6であった。これを先に実施した他の学外実習即ち「臨床実習」での研究⁵⁾と比較したものが図4である。

表1 STAIの個人特性結果

	事 前	第 1 週	第 2 週	第 3 週	合 計	平 均
13	61	37	36	41	175	43.75
44	49	47	54	44	194	48.5
20	61	46	41	48	196	49
31	47	47	52	51	197	49.25
41	51	49	50	47	197	49.25
35	42	54	51	51	198	49.5
39	57	57	50	50	214	53.5
40	55	51	59	49	214	53.5
9	58	59	48	50	215	53.75
12	56	55	58	49	218	54.5
29	42	57	60	60	219	54.75
23	54	62	59	45	220	55
30	55	59	60	50	224	56
4	51	51	62	61	225	56.25
25	54	57	61	55	227	56.75
5	56	57	63	51	227	56.75
43	54	54	59	60	227	56.75
19	57	62	57	52	228	57
32	60	58	56	55	229	57.25
7	54	62	58	57	231	57.75
6	59	60	59	53	231	57.75
24	62	51	56	62	231	57.75
15	49	65	65	53	232	58
36	59	57	61	55	232	58
34	62	60	59	52	233	58.25
21	63	60	58	52	233	58.25
2	62	52	70	50	234	58.5
14	52	65	63	54	234	58.5
1	63	50	63	60	236	59
38	61	58	64	55	238	59.5
26	68	50	61	59	238	59.5
11	69	61	58	52	240	60
37	58	65	60	59	242	60.5
17	62	65	59	56	242	60.5
46	67	56	50	70	243	60.75
33	64	66	64	51	245	61.25
28	60	65	64	57	246	61.5
27	62	62	66	60	250	62.5
42	67	56	66	62	251	62.75
10	64	61	66	62	253	63.25
18	68	66	63	57	254	63.5
8	67	66	66	56	255	63.75
3	59	69	64	64	256	64
16	62	68	71	65	266	66.5
48	66	70	68	63	267	66.75
22	64	64	70	75	273	68.25
45	67	70	73	74	284	71
47	79	72	76	57	284	71
合 計	2,839	2,811	2,877	2,671	11,198	2,800
平 均	59.1458	58.5625	59.9375	55.6458	233.292	58.3229

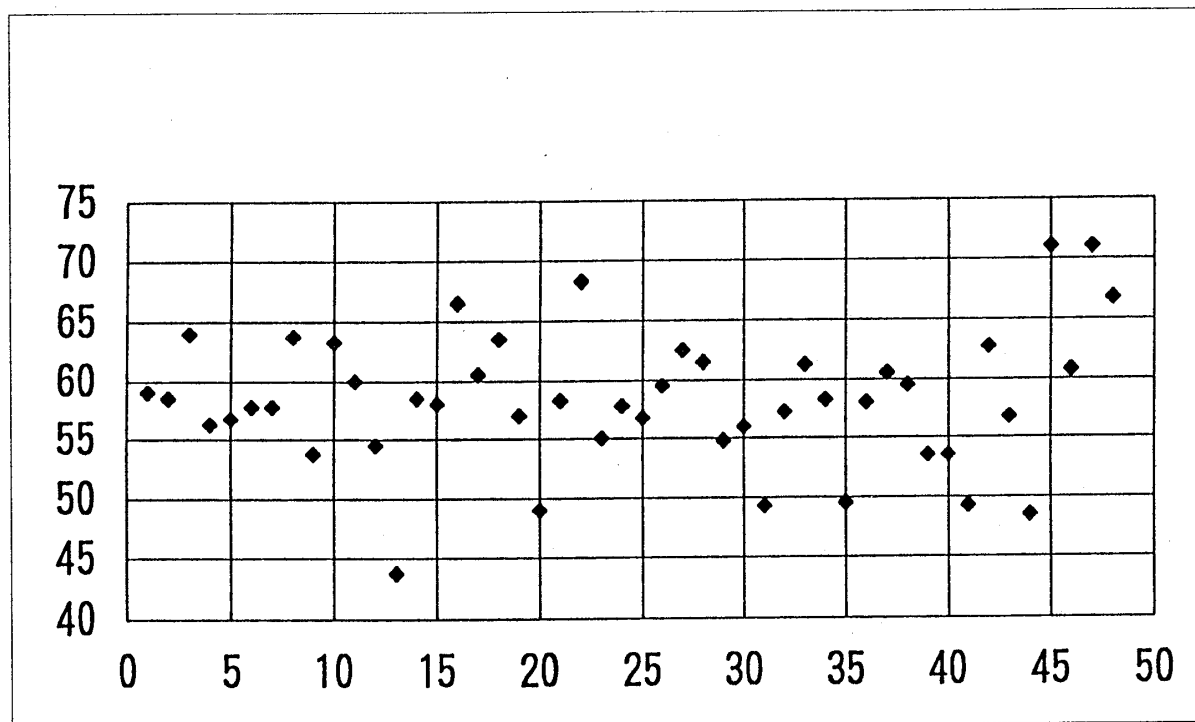


図1 STAIの個人特性平均

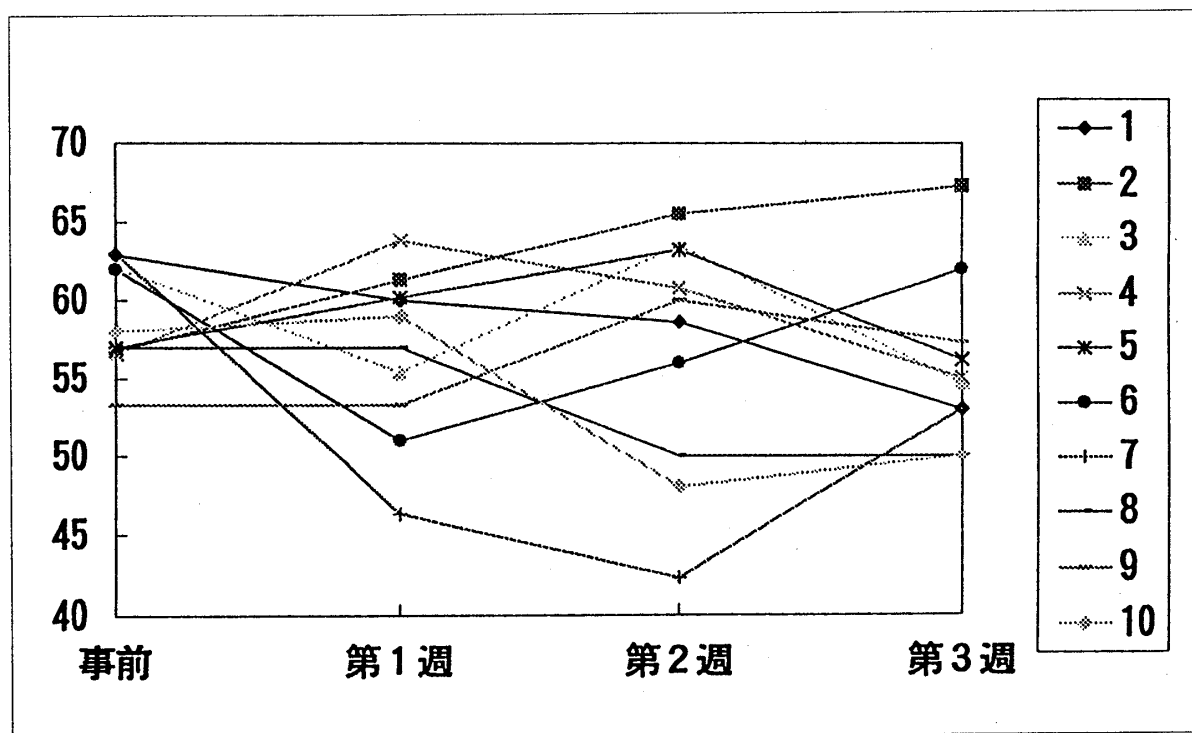


図2 STAIの類型(1)

図3 STAIの類型(2)は図2をそれぞれ独自の型としてみたものである。

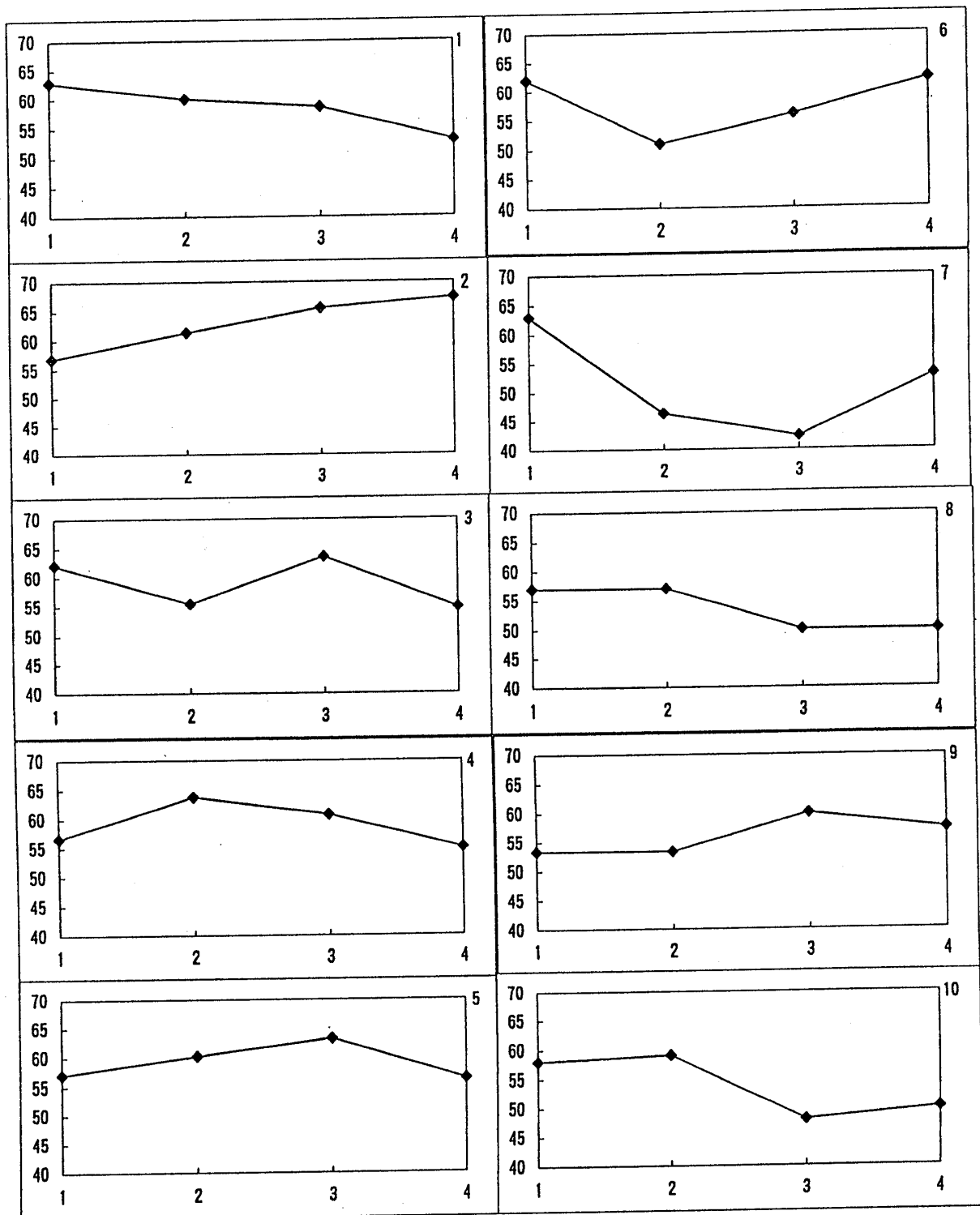


図3 STAIの類型(2)

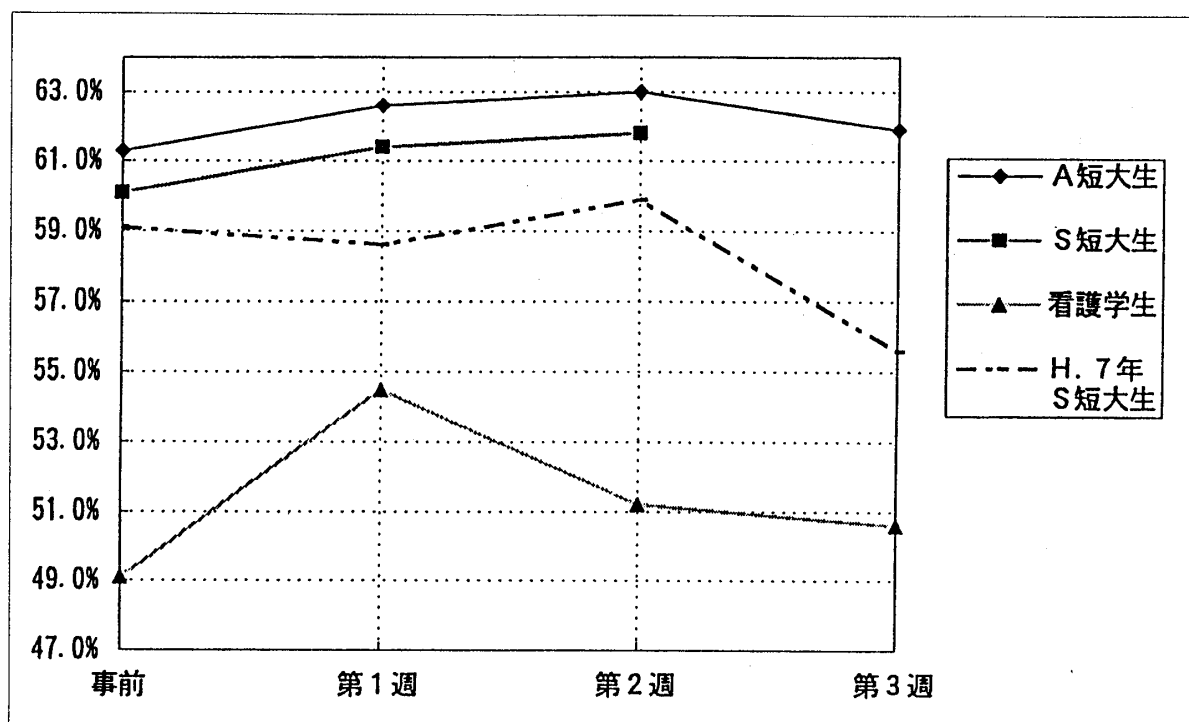


図4 STAI特性の臨床実習との比較

5 実習校での評価

実習校で行なわれた学生への「評価結果」は、その観点項目を学習指導（基礎学力，教材研究，指導技術），生徒指導（児童・生徒の理解，教科外指導，個別・集団指導），実習態度（勤務態度・熱意，事務・実務能力，レポートなどの提出物，教育的な視野・協調性）の3項目10観点よりなっている。

評価基準はA（優），B（良），C（可），D（不可）としB（良）を標準，D（不可）を不

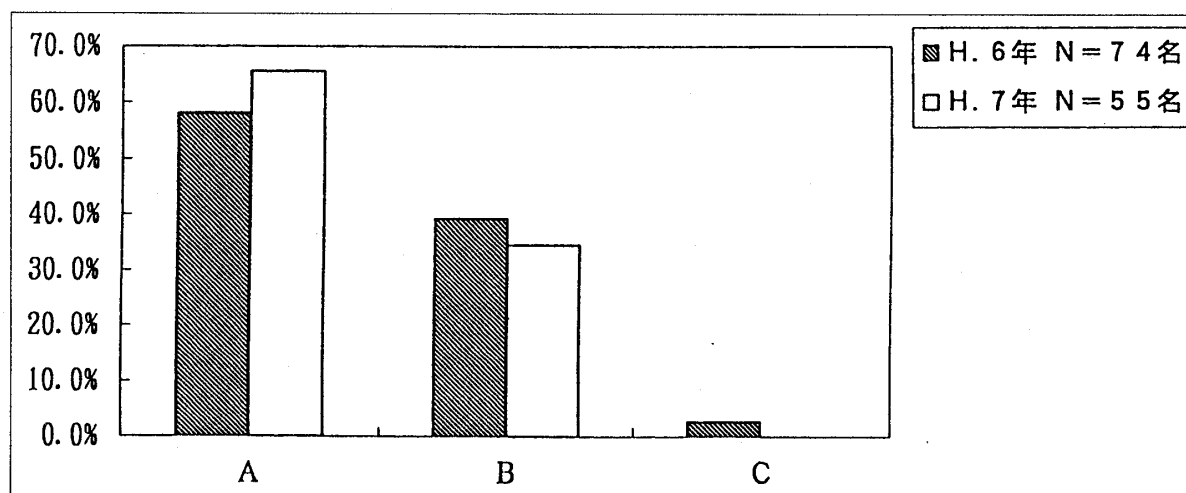


図5 総合評価の比較

合格としている。これらの評価結果を総合評価で平成6年、7年を図にしたものが上記図5である。

6 実習校種

学生の出身校での実習を、校種別に示したものが図6である。

実習校種の選定は、校種別の実習内容を事前に説明しているが、その決定は学生の意思にまかせている。但し実習校側の都合も若干あり、全てが学生の希望に添ったものではない。

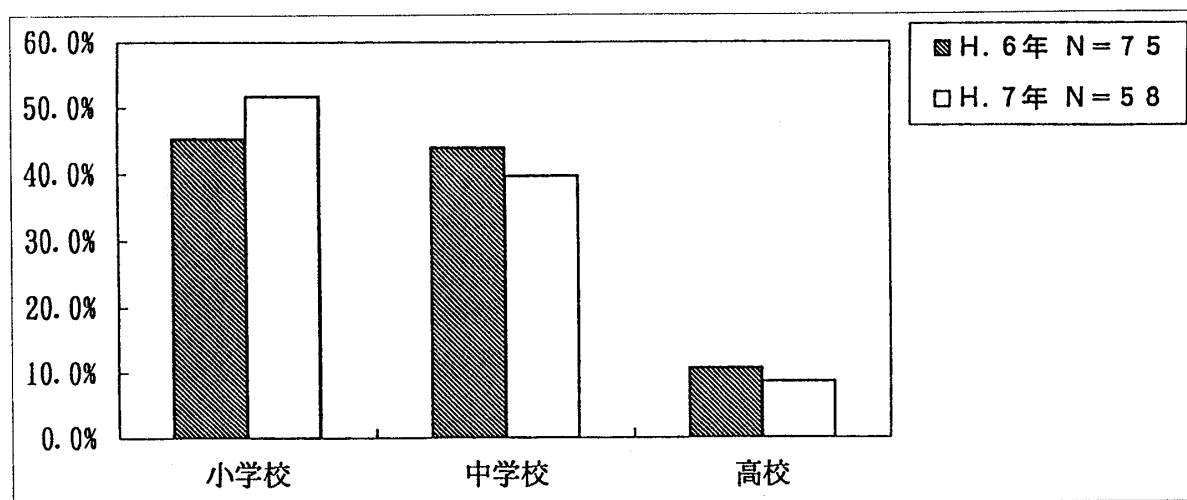


図6 実 習 校 種

III 考 察

STAI類型の10型分類よりみた特性に於いて先ず考えられることは、事前より始まり実習日数の経過につれて下降していく型—即ち1型、8型は不安特性が次第に減少している為、問題はないと考えられる。これらをA型とし、この両型に属する者は8名(16.7%)である。

次に事前に比べ1週目はやや上昇するがその後下降している4型及び10型(準ずるとみなす)をB型とし、14名(29.2%)もやはり先にほぼ同じと考えられる。

更に実習中いったんは下降し、2週目には上昇をみるが実習終了時には下降している3型及び9型をC型とし、その人数14名(29.2%)も特性上は上記に準ずるとみなすことが出来る。

特性が実習経過と共に上昇している2型の4名(8.3%)をE型とし、これに加えて1週目又は2週目にはいったん下降するが、実習終了時には事前よりは低いが上昇した6型及び7型の4名(8.3%)をD型とし、このE型、D型を特性上検討を加えてみることにした。

1 E型について

4名に共通する事項として、実習時間が揃ってⅣ期である。このことはⅠ期に実施されたクラスメートが終了して帰校する時期と入れ替わり、実施が開始されたわけである。1名を除き

実習校種は中学校である。更に2名は、STAIの総合平均が、最高であった。

実習時期がⅣ期である事は、学内の養護実習事前指導を全て受講しており、更に個別指導も受ける機会に恵まれていた。

しかし乍ら実習校での保健指導について考える時、4名共実施する機会を得ており、この内1名については、学内で事前指導中、「ミニ模擬保健指導」の機会を持ち、クラスメートの前で教壇に立って「保健指導指導案」に添った授業展開をし、1人1人からコメントを貰い、教科担当教員からも講評を受けていた。あと1名は、学内での機会があったにも拘らず準備不足ということで、自分から辞退してしまっている。実はこの学生については、実習開始後2度の巡回指導を行っており、2回目が「研究授業」の日でもあり、1時間じっくりと参観することとなった。結果は真剣に取り組んではいたが教材研究が充分でなく、実習校の養護教諭の指導と合致していない部分もあり、学生自身もよく理解出来なかった部分と努力不足を反省していた。

残る2名は学内での「ミニ模擬授業」も実施しないまま実習開始となってしまった。4名共実習校は三重県内であり、実習評価は1名は「A」であったが、3名は「B」であった。

2 D型について

4名の不安特性の平均は、総合平均より低い52.7であり、実習評価は揃って「A」であった。又実習時期はⅠ期が2名、Ⅲ期が1名、Ⅳ期が1名である。実習校種は3名が小学校で1名は中学校であり、県内と県外が共に2名ずつに分かれていた。

個人の特性としてはむしろ低いにも拘らず、実習最終日が共に上昇している事について検討してみると、実習内容や、児童・生徒への対応については困難さはあったものの満足感を抱いているのに対し、最終日になって何か残した事項があるような、又別れが淋しかったといった気持ちが記述されていた。但し1名は終盤になってから体調を崩してしまい、悔いがあったことがわかった。

3 A, B, C型について

一般的に考えられるように、実習前より次第に下降しているA, B及び途中1時期上昇するが最終日には下降して終了するC型を合わせるならば、その人数は36名(75.1%)、即ち4分の3を占めていた。このことは学生1人1人が学内の事前指導も含め、養護教諭を目指す者として、確かな意識と目標をもち学外実習に臨んだ成果といえよう。更に実習校での養護教諭の指導のもとに、児童・生徒と接することが、よろこびとなり、一層明確になっていったと考えられる。実習前に抱いていた「不安や心配及び緊張感」が経過と共に和らぎ、更なる発奮となって日夜の努力へとつながり、終了時の充足感と感謝の気持ちに加え、緊張の解消と安堵へと変化していったと考えられる。

4 臨床実習との比較

過去に調査研究を行なった臨床実習と比較してみるならば、本学学生のSTAIよりも特性は低く、更にその変動はこれ迄の研究で明らかのように、事前よりも1週目は下降し、2週目にやや上昇するが終了時には下降し、しかも事前よりその特性は低かった。この事は、大変意義深く思う。「養護実習は、養護教諭養成教育のカリキュラム全体を通して推し進めていく要の位置にあり、それ迄の学習成果がそこに流れ込んで活かされるところ（時期）であると同時に、そこから先の学習がそこから流れ出す源となる¹⁾」と述べられている内容に合致した教育成果がそこに見いだされると考えられるからである。

5 実習校での評価及び実習校種

実習校での評価結果を昨年度と比較してみると、大変良くなっている。即ち総合評価において「A」であった者は65.5%、「B」については残る34.5%であり、「C」は0であった。更に10に及ぶ評価項目の全てが「A」であった者は12.9%であり、これも昨年よりは、良い結果となっている。

このことは、昨年より新たな方法として導入された「三重県様式」の評価方法が、2年目を迎えたことにもよると思われるが、学生1人1人の意識と努力の高まりともいえよう。

実習校種については、昨年度は小学校での実習は半数に満たない45.3%であったのに対し、本年はそれを越え51.7%となり、中学校、高等学校での実習がやや減少していた。母校の小学校で、温かい指導のもとに、児童との関わりが、学生の実習といえども、養護教諭として又「先生」として、困難や緊張を越える充足感にもつながる養護実習が実施されたとみなされる。

結 語

短期大学での教育に於いて、学生の学外実習は、1年余りの教育期間で実習開始という極めて厳しい現実の上に立ってなされている。この為学内の教職教育及び専門教育が終了しない状態であり、学生自身だけでなく教育機関にとっても、不安、緊張が漂っている。その為現在迄に於いて、本学が「カリキュラム」上のみならず時間割外の個別及び全体指導を、様々な面から試み検討を加え研究としてきた。その結果については以下のようなになる。

- 1 STAI検査の結果事前の特性は、実習開始と共に低下するが、2週間目には上昇し、終了時には事前よりも更に低下した。即ち緊張からの解放とその上にくる充足感とみなされる。
- 2 実習校での評価については「C」は該当者なしで、65%は「A」であり、小学校での実習生に多くみられた。
- 3 特性が実習経過につれて上昇した者は、実習内容及び児童・生徒との対応についての緊張がみられ、最も強い事項として学級に於ける「保健指導」が考えられた。
- 4 学内での「事前指導」を残し実習が開始された学生は、前半に於いて特性はみられたが、

後半は必ずしもそうではなかった。

- 5 IV期即ち前期実習の最後のグループであったにも拘らずE型に属する4名は、実習経過と共に特性も上昇していった。このことは本人の努力が実習校に於いて、充足されなかったと考えられる。

以上STAI検査からみることが出来た「養護実習」について述べてきた。学生にとって入学と同時に脳裏にちらつく「養護実習」は一生涯を通じて貴重な体験であり、それだけに実習校の選定から始まり、準備へとその道は容易ではない。しかし乍ら、実習記録及び巡回指導等によってみられる実習校での学生達は、朝は7時30分には出勤し、放課後もクラブ活動や教員グループの一員としての交わりに入ることも多く、又学級での「保健指導」が予定されている場合は、「指導案作成」やその「準備」の為帰宅は午前0時を過ぎることもあった一男子学生など、学内での学生の姿からは考えられない奮闘と真剣な努力の毎日であったようである。実習校の先生方にはいい尽くせない感謝の気持ちで一杯である。

このような状態に鑑み、今後更に実習校との連携を密にし乍ら、短期大学での「養護実習」が卒業後の「養護教諭としての力量」につながるよう研究を重ね、学生の教育と、教育現場の児童・生徒の指導に生かせる「養護実習」の実現を目指していきたいと考える。

最後に本年実施した「養護実習事前事後指導」の指導項目を資料Ⅰとして示す。

参考文献

- 1) 小林壽子 養護教諭養成教育における養護実習 第1報免許法改正後の教育と養護実習 鈴鹿短期大学 紀要第15巻 1995年 91～99
- 2) 河野友信他編 心身医学のための心理テスト 1990年 27. 28 朝倉書房
- 3) 中里克治他 新しい不安尺度STAI日本版の作成 1982年 108～110 心身医学 22
- 4) Spielberger.C.D.:Anxiety as an emotinal state.In C.D. Spielberger(ed.) Anxiety Current trends and theory. New York: Academic press.1972
- 5) 小林壽子 藤井寿美子 養護教諭養成機関における看護実習 第1報臨床実習に関する調査研究 鈴鹿短期大学紀要 12巻 1992年 107

鈴鹿短期大学 養護実習事前事後指導

平成 7 年実施

養護実習事前指導目標

- (1) 養護実習を円滑に行うことができる。
- (2) 養護教諭の教員としての資質の向上をはかる。

養護実習事後指導目標

- (1) 養護実習に対する自己評価を客観的に行うことができる。
- (2) 養護実習の内容を把握し、今後の教育活動の指標とする。

養護実習事前事後指導

【授業計画】

1. 養護実習の意義と計画
2. 養護実習の準備：保健室執務の意義
3. 教育実習生としての心構え
4. 学校教育に対する理解
 - 学校保健に対する理解
 - 学校保健関係行事の理解
5. 保健指導案の作成演習
6. 模擬保健指導

実施例 担当時間 1 人25分

主 題

対 象

- | | |
|-----------------------------|----------|
| (1) 月経と射精について | 中学校 1 年生 |
| (2) 未成年者の喫煙防止について | 中学校 2 年生 |
| (3) 男女の体の変化 | 中学校 2 年生 |
| (4) 虫歯の原因となるもの | 小学校 5 年生 |
| (5) 歯みがき指導 | 小学校 2 年生 |
| (6) 同 上 | 小学校 4 年生 |
| (7) A I D S の指導（特に免疫機能について） | 中学校 2 年生 |
7. 実習記録と報告書の書き方
 8. 養護実習事後指導